

2021年度国際漁業学会（JIFRS）大会シンポジウム

「日本の小規模漁業の持続可能性とその実現可能性： スモールは今も果たしてビューティフルか」

コーディネータ 李銀姫（東海大学）・浪川珠乃（漁村総研）

E・F・シューマッハー(1973)は「大衆による生産の技術は、現在の知識、経験の最良のものを活用し、分散化を促進し、エコロジーの法則に背かず、希少な資源を乱費せず、人間を機械に奉仕させるのではなく、人間に役立つように作られている」とし、「大量生産ではなく、大衆による生産」を強調したことで、一躍世界のベストセラーとなった。農業分野では、大規模化・企業化する農業の対抗概念としてスモール＝「小農」が出現し始めているが、成長産業化を目指し持続性とともな効率性の追求を目指す漁業において、スモールはビューティフルたりえるだろうか。

漁業の持続可能性は古くて新しいテーマである。持続可能性概念が1987年のブルントラント委員会にて提唱されて以来、多くの議論と研究が重ねられてきたにも関わらず、その実現への道のりはまだ程遠く、漁業の持続可能性については今もなお議論が続いている。そうしたなか、資源の持続的利用や地域社会の維持等の可能性を持つ小規模漁業への関心が高まっており、小規模漁業研究が世界中で進められてきている。近年では、Blue Economy や Blue Growth のイニシアティブに起因するジャスティス・公正性問題、及びその小規模漁業の持続性への影響を危惧し、FAOの「持続可能な小規模漁業を保障するための任意自発的ガイドライン(2015年)」の履行の必要性を訴える研究が増加している。このようななか、漁業者の権利の保障や漁業者組織の確保等、上記ガイドラインの条件を多くクリアしている日本の小規模漁業が、持続可能性の先進事例として注目されている。しかし、長い歴史において沿岸資源を維持してきた日本の小規模漁業とはいえ、今日的な様々な持続性に関する課題を抱えており、効率性を求める成長産業化が唱えられている新漁業法下では、より一層持続性が問われることとなる。

そこで、本シンポジウムでは、日本の小規模漁業の持続可能性に焦点を当て、様々な側面から持続可能性に関してアプローチし、そしてその実現可能性について議論することを第一義の目的とする。これを通じて、Blue Economy や Blue Growth、成長産業化等の大変化時代の現在においても、スモールは果たしてビューティフルかという問いに対する今日的検証を行い、世界の小規模漁業研究の一助となることも目的とする。

日時：2021年9月4日

13:00-17:35

司会 浪川珠乃（漁村総研）、李銀姫（東海大学）

開会挨拶 学会長 婁小波（東京海洋大学）

13:00-13:05

解題	李銀姫（東海大学）	13:05-13:25
	「日本の小規模漁業の持続可能性とその実現可能性:スモールは今も果たしてビューティフルか」	
報告 1	山下東子（大東文化大学）	13:25-13:55
	「持続性の視点から見る小規模漁業の特質と課題:中・大規模漁業と比較して」	
報告 2	井上清和（全国漁業共済組合連合会）	13:55-14:25
	「小規模漁業を持続可能ならしめる日本特有の制度：漁業共済レビューを中心に」	
	休憩	14:25-14:35
報告 3	デレーニ アリーン（東北大学）	14:35-15:05
	「小規模漁業の持続性とコモنز：欧米諸国と日本の比較から」	
報告 4	三木奈都子（水産研究・教育機構）	15:05-15:35
	「小規模漁業の持続性の根幹をなす漁業労働：その現状と対策」	
報告 5	関いずみ（東海大学）	15:35-16:05
	「持続可能な小規模漁業のための価値創造：女性や若者の起業活動からのアプローチ」	
	休憩	16:05-16:15
コメント 1	牧野光琢（東京大学）	16:15-16:25
コメント 2	松井隆宏（東京海洋大学）	16:25-16:35
ディスカッション		16:35-17:30
閉会挨拶	大会委員長 宮田勉（JIRCAS）	17:30-17:35